

# 映画「不都合な真実」で地球温暖化に警鐘



米国のアル・ゴア前副大統領  
 Ⅱ写真Ⅱが地球温暖化について警告する映画「不都合な真実」が公開され、話題を呼んでいる。アカデミー賞でも長編ドキュメンタリー部門など7部門にノミネートされ、邦訳された同名の書籍(ランダムハウス講談社刊、枝広淳子訳)もベストセラーとなっている。来日したゴア氏に聞いた。

(原田友紀)

「いま、気候変動の恐ろしさについてもっと知りたいと願う人が増えている。ワシントンでは、いつも4〜5月に咲く日本から吹かれた美しい桜が、1月第一週に咲く年も出ている。日本でも近年、台風が異常発生している。多くの人が異常気象に驚かされているのだ」

副大統領時代より少しさっさとした印象のゴア氏。大好きなというダイエット・コーラを飲みながらリラックスして語るが、温暖化の問題点を指摘する時は鋭い口調に変わる。

温暖化問題に関心を持ったのは大学生時代にさかのぼる。早くから大気中の二酸化炭素濃度の異常に注目していたロジャー・レヴェル教授の授業に衝撃を受け、政治家となってからも一貫して温暖化対策に取り組んできた。

「1997年、副大統領になったゴアです」映画は自嘲気味な自己紹介で始まる。世界各地で1000回以上にわたって行

## 米も正しい方向へ

### ゴア米前副大統領インタビュー

つてきた温暖化の論議が徐々に映し出される。そこに生い立ちや、一時は当選も伝えられ、最終的にわずかな差で敗れた大統領選など、ゴア氏の人生が重ねて描かれる。「メッセージの送り手に個人的に共感してもらおう。その方がメッセージを受け取りやすい」と考えたからだという。

タイトル「不都合な真実」には、「公害を垂れ流す人々や、彼らから政治資金をもらっている政治家にとって、科学者が示すデータ、真実は不都合だったのだ」と、指弾の意図を込めたと言語。また警告や告発にとどまらず、ゴア氏は「私たちは希望を持つべきだ。いまが危機を解決するチャンス」とする。

1997年、世間各国が二酸化炭素の排出削減に合意した京都会議では、重要プレーヤーとして交渉をリード、京都議定書の採択にこぎつけた。自身は「素晴らしい結果」を誇りに帰国したが、「100人の上院議員のうち、1人しか議定書の批准を説得できなかった。そのことをとても悔やんでいる」と言う。

その後、米國はブッシュ政権となって議定書から離脱した。ゴア氏は「京都の次の枠組みが完成するまで、米國が議定書に復帰することはないだろう」との見

通しを示しながら、「米國が対応を抜本的に変える可能性は高い。やるべきことは多いが、正しい方向へ向かうだろう」と確信を込めて語った。

実際、米國の大手企業10社が先週、二

酸化炭素の排出量を大幅に削減する数値目標の義務化を大統領に提言。ブッシュ大統領も23日の一般教書演説で、2017年までにカーボン消費量を20%減らすという目標を掲げた。

温暖化問題が迫っているのは、米國に代表される大量消費文明の転換にほかならない。米國の大衆はこうした変化を受け入れられるだろうか。

「習慣を変えるのは難しいが、変えられるはず。やらなければならない。いますべての國家がより強力に行動することを求められており、米國はその最たる國だ。ゴア氏が「使命」とする講演行動はこれからも続く。

映画は、東京・TOHOシネマズ六本木ヒルズ、大阪・ナビオTOHOプレックスなど、全国で順次公開されている。

## 潮流

